NO ５６２　　令和６年１月２２日(月)

3学年だより

夢の宅配便

3年学年主任
水野　喜代治

「担任の先生と私…感謝」

私が中学生の時代はもう昔のことで、今からちょうど５０年前ということになります。５０年前の公立高等学校の合格発表のやり方は、高等学校の入口に大きな掲示板が立てられて合格者の受検番号が張り出されました。受検した中学生は、合格発表の時の注意事項を高等学校ごとに集まって担当の先生から伝えられて、みんなで発表を見に学校を出ました。「掲示板に発表された受検番号をしっかり見て、合否を確実に確認してくること。合格した人は高校の事務室に受検票を持って行き、合格通知と入学手続きの書類を受け取ること」と注意されて、みんな緊張した表情で高等学校に向かいました。私は、千代中学校から西湘高校までみんなで結果を確認しに行きました。『合格掲示板は、自分の目で確認するから、絶対に私より先に、「喜代治受かってるよ！」などと言わないように』と友達と確認しました。西湘高校の正門を入ったすぐ右側に大きな立て看板がありました。合格者は４５０人ですので、受検番号１から番号が書かれていました。４５０人の定員のところ受験者数は４８０人でした。３０人が不合格になります。その中に入っていないか、心臓がドキドキしました。千代中からは１０人の友達が受検しました。それぞれ自分の番号を確認します。「あったー！」と歓声が上がります。私も勇気を出して掲示板を直視します。私の受験番号がありました。「あったー！やったー！受かった！」私は掲示板の前で嬉しさを爆発しました。

本当は、落ちてる生徒がそばにいるかもしれないので、喜びは押さえるのが礼儀なのでしょうが、「水野は１００％、いや２００％落ちる」と担任の市川先生に言われ続けていた私は、嬉しさを抑えることはできませんでした。友達と抱き合って喜びを分かち合いました。千代中から受検した１０人は全員合格しました。みんなで、事務室で合格の手続きをしました。「おめでとうございます。合格通知と入学手続きの書類と入学式までにやってくる宿題が入ってます。確認してください」と事務の先生が分厚い封筒を手渡しました。分厚い封筒が合格の重みを表しているようで嬉しかったです。

学校に戻って、先生に合格を報告しました。私は担任の市川先生に合格通知を見せつけたい気持ちでした。二言目には「水野は１００％落ちる。受ける高校を変えなさい」と何回も私に忠告してきた担任の先生に報告したかったのです。「市川先生、合格しました」と自信たっぷりに報告すると「当たり前だ、水野が受かることはわかっていた。予想通りだ」と表情も変えずに私に話しかけてきました。「先生は、１００％落ちるといっていたでしょ」と反論しようとすると「お前は、受かる力があるなどと褒めると、すぐに調子に乗って受検勉強もいい加減になるタイプだ。自分に甘く厳しく自分を追い詰められない。だから、お前は１００％落ちるといったんだ。そうしないと勉強しないから。お前はそう言われれば、悔しがって夢中で勉強するだろう」と、まるで、なんでも先が分かる預言者のような口ぶりで言われました。「早く、お母さんに連絡してあげなさい」と言って突き放されました。もし、私が不合格だったら「だから言っただろう。落ちると。人の忠告を聞かないから、世の中甘くないんだ。」とか言われたと思います。しかし、そういう、市川先生が私は、どの先生より好きでした。市川先生が求めていることが目先の合格や不合格とかでなく、「自分の生きる道に誇りをもって生きていくこと」を常に言い続けていました。「１００％落ちる」と言って、私が進路変更するならそれでよし。言われても受検するのもそれでよし。自分で自分の道を決めることが大事ということを教えてくれたのだと思う。「２００％落ちる」と私に言っても受検した私を市川先生は「それで良い」と心の中で思ってくれたのだと思う。市川先生の心の中で私の進路決定を認めてくれていると私は感じたから、落ちても受かっても市川先生が私に何を言うのか予測できていたのだと思います。もし落ちた時に「だから落ちるといっただろう。世の中そんなに甘くないんだ」と市川先生に言われたら「はい、ありがとうございます」と私は市川先生の言葉をどんな慰めの言葉より前向きに受け止めて頑張っていけたと思います。

「１５の春」を市川利文先生のもとで苦しんで乗り越えたこの気持ちは、今も私の心から消えることはないです。先生には今でも感謝しています。

t るみ g 輝美